

教材研究と教材の扱い方 (33)

——「同じ心ならん人と」(『徒然草』第百十二段)——

菅 原 敬 三

一

まずは総論的な話から進めたい。今日本は、第三の国難にあると言われている。概略すると次のようになる。

第一の国難は明治維新 … 外国からの侵略をどう防ぐのか

第二の国難は第二次世界大戦敗戦後の状態からの脱出 … 食物、住居、教育、経済などの困難や行き詰まりから、どういう国を創っていくのか

第三の国難は現在 … 政治、経済、外交などの行き詰まり、自然災害後の復興など。

第一の国難の場合、憲法自体の作成から始めなければならなかった。第二の国難の場合は、憲法改正に加えて、貧しさからの脱却をどう図っていくのが問われていた。第三の国難の場合は豊かさの中にありながら、閉塞感が支配

している。この状況をどう打開するのか。

*

明治維新のことは、あまりに遠いので置くとして、第二次世界大戦敗戦後のことを考えると、貧しさからの脱出をどう図るのが大きなテーマになった。敗戦後の当時、映画館で流されたアメリカの生活が、観客の目を奪った。一週間の食材を冷蔵庫に保管し、電気製品の発達で家事が軽減され、余った時間を余暇に回してドライブを楽しむ。車に乗る若者の笑顔が、この上ない幸せに映ったのである。食べ物、着る者に窮し、闇市などで調達するのが、当時の日本の状況であった。「物質的な豊かさの中に幸せがある」と、当時の人間は誰も疑わなかった。「貧しさからの解放」に大きな目標を設定したのである。今では信じられないことであるが、戦後日本の工業製品は「安かろう、悪かろう」と言われたのである。一ドルは三六〇円、そこから日本は出発したのである。

日本人が白米を常食するようになったのは、昭和三〇年

代になってからである。昭和三〇年代になって「もはや戦後ではない」という言葉がもてはやされ、「所得倍增計画」を当時の首相池田勇人が政策として発表したのである。昭和三〇年から四〇年代にかけて日本が経験した「右肩上がりの経済成長」は、「世界の奇蹟」とよばれたのである。

現在は「一億総中流」と言えるほど豊かになったのである。しかしながら、ここで日本は行き詰った。庶民がこれほど豊かに生活できるようになったのは、有史以来初めてのことである。ところが、たった五十年で行き詰った。豊かさの中から閉塞状況が生まれてきたのである。「豊かになれば幸せになる」と思って、当時の日本人は働いてきた。企業戦士などと呼ばれ、日本を豊かにするために、個人に属するものは脇に置いて身を粉にして働いてきたのである。そこに落とし穴があった。誰もが間違えてきたと言ってもいいであろう。「豊かさは目標であって、目的ではない」「何のために豊かになるのか、豊かになって何をしようとするのか」という視点が欠けていた。「欠けていた」というより「分からなかった」のである。今の時点から「敗戦後の混乱期にあるとはいえ、目的が見定められなかったが悪かったのだ」と言葉では簡単に言えるが、その言葉で当時の人間を責めるのは酷なことである。人間としてやってはならないことであろう。それほど日本人は追い詰められていたのである。

「過去の時代から学んだ上で、今の時代、我々は何をしなければならぬのか」が問われている。教育の分野でも、この問いは生きている。

「日本の教育は古来リーダー育成に力を注いできた。そして、そのリーダーが日本を引っ張ってきた」という事情がある。しかし、この姿勢で作ってきた日本が行き詰ったのである。日本も「変わるべき時が来た」ということであろう。巨視的な視点から、将来の展望を持たなければならぬ時代なのである。

*

では、どうすれば良いのかとなれば、姿勢や視点を変えること。一人の優れたリーダーが全てを引っ張る状態から脱出することである。日本には何が欠けていたのか。日本古来の教育観は、

・「教師が上、生徒は下」という上意下達の教育観

・「生徒は、教えてやらなければ何も持っていない存在」という生徒観

というものであり、それを強く信奉してきた。しかし、その変革が求められている。

どう変革するのか。私の体験からすれば、

- ・生徒の可能性を拓く ∴ 生徒を信用しなければ、生徒の可能性は拓かない。
- ・国語の教材を深く読み、そこから発見した課題や問

題を、「筆者（作者）、生徒、教師が対等の関係で解いてゆく」

現在の時代的閉塞感を打開するには、「一人一人が自立した人間になる必要がある」。加えて、教師自身も変わる必要がある。「認識主体（①何が問題なのか、②どうしてそれが問題となるのか、③どのように分析できるのか、④そこにはどういう価値が見出せるのか」が分かる主体）」として成長する必要がある。「教え込む教育から、生徒の主体性を育て、自立した人間となるべく生徒の内に潜んでいる可能性を拓く」教育を行うことであろう。

＊

国語の教育を変革するのに、もう一つ大切な要素があるように思う。私は定年退職後手紙を書く機会が増えたが、「思いの交換」ができないのである。一回や二回は続く。しかし、その後が続かない。その原因は、いくつか考えられる。一つは「共感力の無さ」、二つに「事実と結論しか視野に入っていない」ということである。「こういうこと、またこういうがありました。その時こう思いました」ということがほとんどであった。「事実と結論」を書けば、後は書くことが無い。手紙を貰った喜びはあるものの、自分の方からはもう書くことが無い。加えて「どう書いてよいか分からない」という答えも返ってきた。

そればかりか、「自分の若い頃受けた国語の授業の印象は、

どうですか。どのような感想がありますか」と尋ねたところ、ほとんどの人が小首をかしげるのである。「面白かったですか」と聞くと「別に」という答えが多かった。

何ということであろう。あれほど全国の国語の教員が頑張ってきたというのに、こういう感想しか返ってこない。我々は考え直さなければならない。これは個人の体験であり、一概に結論めいたことは言えないかもしれない。しかしながら、以上述べたことが、全く特異な事例であるともいえないであろう。私が尋ねた人達は、私が育った地域とは異なる地域で教育を受けてきた人達である。

我々の授業観の変革や人間観の変革に関して、非常に示唆的な文章がある。毎日新聞の第一面のコラム欄「余録」の記事である。

バーモウとはビルマ語（現ミャンマー）の独立運動家で、戦時中に日本軍に支援されて親日政権の国家元首となった人物である。その彼は戦後になって日本人についてこんな風書いている▲「この人（日本の軍人）たちほど他国人を理解するとか、他国人に自分たちの考え方を理解させるとかいう能力を完全に欠如している人々はいない。彼らが事の善し悪しにかかわらず、常に土地の人々にとって悪いことはかりしたように見えるのはそのためである」▲彼は続けている。「軍

国主義者たちはすべてを日本人の視野においてしか見ることができず、さらにまずいことにはすべての他国民が同じように考えねばならないと言いつつ張った。

……ものごとをするにはただ一つの道しかなかった。

それが日本流ということだった」▲戦後68年は日本人が物の見方の異なる「他者」を理解し、相互の利益に根ざす繁栄をアジアはじめ世界の諸国民と築いた歲月だった。その節目の日の安倍晋三首相の式辞から従来あった他国民への反省や哀悼を示す言葉が消えたことが疑念や臆測を呼び起こしている▲式辞は国内の戦没者を追悼しつつ戦後の平和的な歩みにもふれたものである。だが、首相の歴史認識が内外で問われる中では「消えた言葉」が注目されるのは仕方ない。それをアジアや欧米の国民、とくに戦後日本の変貌をよく知り、高く評価する友人らはどう見たか▲もしや「日本人の視野」へのひきこもりの兆候と取られはしなかったか。惨憺たる外交的孤立の中で戦没した人々を悼む夏、首相には戦後日本がつつかった国際的共感や友情を軽んじぬ賢慮を望みたい。

2013・8・17

ここに書かれている「日本の軍人」の単一的な物の見方は、彼らだけが身に付けたものではあるまい。日本人が日

本人であるが故に身に付けた「ものの見方・考え方」である。地上で他国と国境を接していない国は、こういう物の見方を身に付けてしまうことであり、また国土狭小、考えや価値観が全国で統一される国、気候風土は全国で違いがあっても、風習や行事（お盆や年末・年頭の行事）などは全国一律であることなどが原因するということを、我々はまだ認識しなければならない。幅広い物の見方をいかに養うかが問われている。

また、「国際的共感力の無さ」にも目を向けなければならない。一気に「国際的共感力」といっても難しい。共感力は、国際的なことだけが問われる訳ではない。日々の我々の生活や自分の人生を豊かにするために必要な「人間力」である。他者が発した発言や情報を、まず自分の中に取り込み、自分の考えに照らす。その発言や情報の価値判断を行い、自分の考えを整理した上で、今度はこちらから、自分なりの考えや判断を発する。それが「共感力」というものである。「共感力」を育成するには、「内省力の育成」も欠かせない。「自分の内（心）を見つめる力」を育成する。単に相手の言うことを理解するだけでは、互いの交流は進まない。この能力の育成が従来日本の教育にはかけていたということである。

今の教育現場を見ても、受験の重みが大きい。むしろ大きすぎるといってもいいほどである。ここでも単一の価値

観が支配している。社会が、また保護者が、受験に対する信頼を相変わらず持つているということである。「いい大学に行けば将来が約束される」と今だに思っている。約束されるのは、ごく限られた人間でしかないのである。戦後の価値観が今だに力を持っているということである。しかし、考えなければならぬのは、この考え方や教育観が行き詰ってきたということである。

我々は、時代感覚を磨かなければならない。今からの時代、国際化がどんどん進んでくる。従来のように、社会のリーダーや経営者が全てを仕切るということでは、やっていけないであろう。国民の一人一人が自立していなければ、難局は切り開けない。一人一人が「認識主体」(①何が問題なのか、②どうしてそれが問題となるのか、③どのように分析できるのか、④そこにはどういう価値が見出せるのか)が分かる主体」として成長していなければ、世界に対応できない。「日本で生活していれば、世界と関係しなくてもやっていける」という時代は過去のものである。これから時代・社会は、食糧事情一つ考えても国際化は避けられない。黙っていても、自分の周囲には外国が押し寄せてくるのである。

我々国語の教員も、前述したように従来の教育観や学力観を脱出する必要がある。受験学力は大切なことは分かるが、そればかりに寄り掛かることは避けなければならない。

受験学力に加えて、新たな学力を育てる視点が必要となる。前述したように、「共感力の育成」、「内省力の育成」もその一つである。

*

国語の教師が教材研究を行う場合、「ここに(この教材に)書いてあることは、君(生徒)の問題だろう」と言えるまで、教材研究を深めなければならない。これも「共感力の育成」に関わる視点である。その上で、発問、板書を工夫し、授業の展開を面白いものにしていくのである。教材に書かれていることが、自分と関係しているとなれば、生徒は真剣に教材と向き合わなければならない。自主的に能動的に問題発見、解決、価値発見をするために、授業に参加しなければならない。

受験の問題を見れば分かることだが、「問いは全て一問一答」、「受験生の生活とは無関係の場合が多く、問いの意図にどれだけ近付くことができるか」が問われる。優位にあるのは、常に問題作成の側であり、その問いの意図をどれだけ掴み、出題者の用意した答えに、どれだけ近づくことができるかが問われる。この観点で国語の授業を行えば、大学入学後に「国語の学習は終わった」と「国語を捨てる人間が増えてきても仕方がない」のである。本来、国語というものは、自分の人生に深く関わり、「言葉の力」というものは、「人生を豊かにする必要不可欠のもの」である。あ

らゆる人間との交渉や交流、事態を把握し、困難を開するの大きく関係してくる。

我々国語教師が考えておかねばならないことは、受験学力は限られた学力であるということである。受験学力を大切にした上で、もっとトータルで、グローバルの視点からの学力育成が望まれるということである。

理解領域の教材の扱いにしても、表現領域の扱いにしても、「共感力の育成」、「内省力の育成」並びに「生徒を認識主体として育成する」ということを視野に授業研究を行わなければならない。

二

以上のことを踏まえて教材発掘を行えば、現代文にしろ古典の作品にしろ、いくつかの作品が浮かび上がるであろう。ここでは、過去教科書教材に採られた作品を中心に考えてみたい。『徒然草』第十二段を取り上げたい。本文は以下の通りである。

おなじ心ならんと、しめやかに物語して、をかしくきことも、世のはかなき事も、うらなくいひ慰まんこそうれしかるべきに、さる人あるまじければ、つゆ違はざらんと向ひあたらんは、ひとりあるこちやせん。

たがひに言はんほどの事をば、「げに」と聞くかひあるものから、いささか違ふ所もあらん人こそ、「我はさやは思ふ」など、あらそひにくみ、「さるから、さぞ」ともうち語らば、つれづれ慰まめと思へど、げにはすこしかこつかたも我とひとしからざらん人は、大方のよしなしごと言はんほどこそあらめ、まめやかな心の友には、はるかに隔たる所のありぬべきぞ、わびしきや。〔『徒然草』日本古典集成 新潮社 以下同〕

『徒然草』に収録されている章段は多様な性格を持つ。文化論であつたり、四季それぞれの風流の話であつたり、歴史上の偉人に関わる話であつたり、職人のものの見方の鮮やかさであつたり、僧侶の失敗談、有職故実に関係する話や『源氏物語』と踏まえた表現などもある。

しかし、この第十二段は、その中でも趣を異にする。言つてみれば、「独り言」である。わざわざ書き記して人に見せるような話でもない。他の章段のように、読者を意識したものや位置づけなくてもよいような話である。これこそ、「自分の内（心）を見つめて」気付いたことを記したものと捉えることができよう。前段の「山里の閑居生活」を記したことからの連想で、この章段が成立したとの論もあるようだが（『徒然草』日本古典集成、第十二段の頭注）、単独でこの段を読む場合、心の内の「つぶやき」を記した

ものと考えられる。これを生徒の自己認識の育成や共感力、内省力の育成のために使用したい。様々な試みが考えられよう。いくつかを記してみたい。単独で扱う場合と他の章段と重ねて扱う場合とを考えてみたい。

【試案1】

単独で扱う場合。

この段では、何種類の友が出てくるかを捉えることが中心になろう。この文章は決して論理的に書かれてはいない。『徒然草』には、連想によって書かれている文章が多く見られる。この段もそれと同じである。

この段を「友情論」と位置づけると、「おなじ心ならん人」と「いささか違ふ所もあらん人」と「心の友」という三種類の「友」になるのであるが、これらにしても互いにどのような関係しているか、厳密に分類されている訳ではない。また、「友」ということを考えた場合、ここに書かれている「友」が「友」の分類の全てではあるまい。様々な視点から「友」の性格を考えることはできよう。それがなされてはいないのである。

「心の友というのは得難い」ということから、思いついたことを記したと考えた方が自然である。まさに「つれづれ草」である。

しかし、視点を変えると、この章段の利用価値が出てく

る。「自分の内を見つめたからこそ、書かれた章段」となれば、生徒に「自分の心を見つめ、兼好が書いたように、自分でも書いてみると、どのような文章ができるか、書いてみよう」という試みができる。自己省察の一助になる。作業としては、二段階の展開になるであろうか。

一つは、兼好の言う「友」は何種類出てくるか。その整理と兼好のこの「友」の論について、どう評価するか。二つに「自分（生徒自身）の「友情論」を兼好の文章に倣って書くと、どのような文章になるか、自分の心を見つめて書いてみよう」。こういう試みが考えられよう。

最初は、堅苦しくならず、生徒の思いを尊重して自由に書かせてみるのがよいと思う。自分の作品の発表の場を考えてもよいであろう。

【試案2】

他の章段と合わせて読む。序段と合わせる場合なども考えられる。序段の文章は、次の通りである。

つれづれなるままに、日くらし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

この序段と第十二段を合せて読むと、第十二段の文章の

色彩が顕著になる。どのような意味合いが発見できるか、生徒を「認識主体」にするための展開を考えるのである。

二つの章段の関係を考えると、明らかに序段の力が優つていると理解できる。第十二段は、兼好の「心にうつりゆくよしなし事」の範疇に入るものであり、それを「そこはかとなく書きつくれば」、「あやしうこそものぐるほしけれ」という気分になったのである。

序段の意味が把握された後、「両段の関係を考える場合、どのようなことが発見できるか、考えてみよう」という試みが成立する。

こういう試みはあまりなされていないであろうから、教師の助言や手助けが必要となるかもしれない。「序段のどの表現と第十二段の話とは、どのように繋がっているか考えてみよう」と助言してもよい。「自分で発見したことを自由に書いてみよう」でもよいであろう。生徒の目を拓けることを図りたい。

【試案3】

また、第百十七段を利用するのもいいかと思う。本文は以下のとおりである。

友とするにわろき者、七つあり。一つには高くやんごとなき人。二つには、若き人。三つには病なく身強

き人。四つには酒を好む人。五つにはたけく勇める兵。六つには虚言する人。七つには欲深き人。

よき友三つあり。一つには物くるる友。二つには医師。三つには知恵ある人。

この章段を利用して、「自分のよき友、悪き友」を書いてみようという試みは、よくなされている。しかし、序段や第十二段と合わせて読む場合は、生徒の意識は違ってくる。第十二段でテーマへの迫り方が学べた後は、生徒の考えに連想があっても、簡単に結論だけを書けばいいと言う意識は無くなっているであろう。「簡単には書かず、丁寧に自分と向き合ってみよう」という教師の助言は力を持つはずである。

三

我々が「国際感覚を身に付ける」という場合、気を付けなければならぬのは、「自分と他者の関係」についてである。これは「他者理解」に関することであり、この「他者理解」が大きな影響を持つのである。我々が幼児期に両親の許を離れ、外の社会に出た時、今では保育所や幼稚園となるが、ここで初めて自分を根本的に支えてくれた人間とは異なる「他者」と出会うことになる。

この原初的な「他者との出会いの意味」が、成長する過程で自分のものとなっていない場合、大きな事件を引き起こすことになる。つまり、社会的他者との最初の出会いで「この人は自分とは違う。この自分と異なる他者と、どう付き合っていけばよいのか」というテーマが突き付けられるのである。当然幼児に、こういう認識が持てるはずがない。しかしながら、人間が成長する過程で、必然的にこのテーマと向き合わなければならなくなる。そのように人間は造られている。このテーマと無関係に生きていける人間などはいない。しかし、この問題意識を自分のものとできていない場合、毎日新聞の「余録」の記事にあつたように「この人（日本の軍人）たちほど他国人を理解するとか、他国人に自分たちの考え方を理解させるとかいう能力を完全に欠如している人々はいない」ということになるのである。

「他者理解」を行う場合、大切なことは、まずは「相手の存在を尊重し、存在意義に敬意を払わなければならない」。それを怠ると「支配、被支配の関係、または他者の排斥」という意識ばかりが育ってしまうのである。これが問題を起こす。まずは、相手の言葉に耳を傾けなければならないのである。この前提が自分のものとなっていないなければならないのである。諸外国は日本とは考え方にしても感覚にしても、極端に異なる場合が多い。まずは相手の言葉を自分の心に入れ、自分の考えと照らし合わせ、吟味したうえで、今度は自分

の考えを発していかなければならない。それを繰り返すことが、「相互理解、国際理解」ということになるのである。また、人間が自立する上で、「共感力」「内省力」が大切と前述したが、これも「他者理解」と深く関係している。

「共感力」に関して試案を述べたが、これは日々出会う人間との間だけのことを問題にすればよいということではない。「共感力」は、教材との間でも必要になってくる。たとえば「山月記」を例にとれば、主人公の「李徴」との間で「李徴の哀しみを感得する共感力」を教師や生徒自身が持たなければ「深い他者理解」はできない。自分とは関係のない「対岸の火事」のように読むのでは「共感力」を養うことはできないのである。

袁俊に出会った時、李徴はなぜ心を開き、自分の悲惨な人生を語ったのか。「この人間なら自分の悲しみ苦しみを理解してもらえる」と考えたからであるが、李徴を理解する上で、それが分かれば良いということにはならない。「なぜ李徴は、あれほど詳しく自分の人生を語ることができたか」が問われなければならないのである。全く理解のできない不条理な苦境に、なぜ自分が落ちなければならなかったのか、いくら考えても分からない。日々悶々とするのが、際限なく続いていく。朝目覚めた時、昨日と同じ問題が心を縛り、自分を苦しめる。どれほどの時間が過ぎていったか、どれほど自分の人生を呪い、理不尽な思いに捉われた

か。それでも原因が掴めない。しかしながら、その悲嘆の苦しみを続けるうち、ある時「はっ」と気付く、その原因が自分の心にあったのである。自分の心を見続けたからこそ発見できたことである。それが分かった時、償いをしなければと思い立つことができたが、それを果たすべき手段が自分にはもう残されていない。誰に打ち明けることもできない。悲しみがより深くなってしまった。その時、袁修に出会ったのである。自分の苦しさを綿々と述べる李徴に共感できなければ、感動的な授業を展開することはできない。また生徒に「人間としての共感力」を養うこともできないのである。

我々国語教育の教員は、これらのことを念頭に置き、日々の授業に臨まなければならない。

*

最後に、もう一つ付け加えておきたい。日本の軍人の「単一の論理」が新聞に載せられていたことを示したが、これは日本人全員に関わることも指摘した。我々一人ひとりがその価値観と無関係に存在することはできない。我々がなさなければならないのは、その原因を探索することである。「外国と地上での国境を持たないことが大きな原因である」等という私の気付きを述べたが、原因は他にも多々考えられるのであり、付け加えると「他者理解が不十分で、自分の考えだけを主張してしまう」のは、「自分の考えや価値

観に絶対の自信を持っている」ということである。いわば「自分なりの正義や常識が絶対的に正しい。それに従わないのは、相手が至らないからだという想いがある」ということである。自分の考えが譲れない背景には、こういう考えが存在している。自分の身近で起こる事件を考えると分かるであろう。しかし、気を付けなければならないのは、「自分の正義や常識は、世間や世界の正義や常識ではない」ということである。特に外国人と接する場合、自分の正義や常識は通用しない。「自分と異なる人間とどう接すればよいか」は、普遍的真理である。我々国語科の教師は、そのことを視野に入れて授業に行わなければならない。

こういうことは、自分の心を見つめなければ、発見できない。自分の心を見つめなければ、深い所に潜んでいる「物事の真理」にはたどり着けない。「内省力」が必要な理由である。

「他者理解」「共感力」「内省力」の育成は、国語科が中心的に担当しなければならない。なぜなら、「教科書には、そういう問題を含む教材」が多く、「言葉」また「言葉の働き」を思考の対象としているからである。「言葉の力」を育成するのは、国語科の教師に課せられた使命である。これらのことを、我々国語科の教師は心深くに刻印しておかなければならない。

（本学名誉教授）